群集墳の築造と被葬者像

―太鼓塚古墳群を素材として―

堀　真人

目次

１．はじめに
２．調査成果の解釈と課題
３．太鼓塚古墳群の支群の検討
４．太鼓塚古墳群の平面プランの検討
５．古墳群の形成について
６．古墳群形成モデルの提唱
７．おわりにかえて

― 論 文 要 旨 ―

滋賀県大津市に所在する志賀古墳群は、渡来人の奥津城として著名な古墳群である。

古墳群を構成する古墳の中には、埋葬施設として方形もしくは横長方形の平面プランで、急激に四壁を持ち送る穹窿頂石室がみられ、副葬品としてミニチュア炊飯具や釵子、指輪、釧などの装飾品を持つ。被葬者は、釘留式の木棺に入れられることが多いなど、通有の古墳と異なる特徴を持つ古墳が多く含まれる。また、古墳群が築かれた比叡山東麓の扇状地では、大壁建物やオンドル遺構が検出されており、渡来人が居住していたことが明らかになっている。その点も志賀古墳群が、渡来人の墓であることを補強している。

しかし、巨視的には渡来人の墓であることは間違いないが、微視的には石室の平面プランも通有の長方形プランの比率が最も高く、ミニチュア炊飯具の出土率も志賀古墳群全体でみれば５割にも満たない。つまり、特徴的であるが、すべてにあてはまるわけではない。本稿では、このように様々な平面プランの古墳が混在している状況や、ミニチュア炊飯具を副葬する古墳としない古墳の違いは何なのかを説明することを試みた。これらの問いに対する説明は、被葬者に在地人と渡来人が含まれ、その違いで説明されることが多かった。しかし、筆者は、副葬土器の配置や平面プランの検討から志賀古墳群が非常に斉一性の高い古墳群と評価し、その被葬者は渡来人集団であると考えており、従来の見解に無条件で従うことはできない立場である。

そこで、本稿では、志賀古墳群の中で最も資料が整っている太鼓塚古墳群を素材として、既往の研究を紐解きながら、古墳の分布（支群分け）と石室の平面プランの二つの検討から、古墳群の形成原理を明らかにすることを目的とした。

その検討の結果、太鼓塚古墳群に埋葬されている集団は、古墳群の周辺地域で活動している人がそのまま埋葬されるのではなく、別の地域で活動していた人が埋葬される「帰葬」であったと想定した。それは、被葬者が、出自等に規定される集団と、平時生活をしている活動集団の２つに所属しており、古墳を築造する場所の選定では出身集団が重視され、活動集団は、石室の平面プランやミニチュア炊飯具の有無を規定すると考えた。

本稿で提起した仮説モデルで、目的とした問いに対する回答を提示することができたが、それには、様々な前提条件が存在しており、今後、様々な具体的な事例で検証することが必要である。その点では、まだまだ課題が多く残されており、当時の実態の解明にわずかに一歩踏み出したに過ぎない。

―――　**キーワード**

志賀古墳群　太鼓塚古墳群　渡来人　帰葬　支群の形成　玄室平面プラン　ミニチュア炊飯具